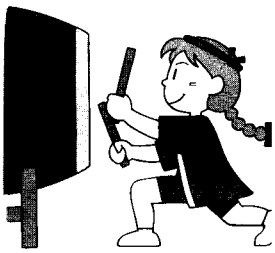
国営木曽三川公園
138タワーパーク

愛知県太鼓のつどい

和太鼓 in 一宮

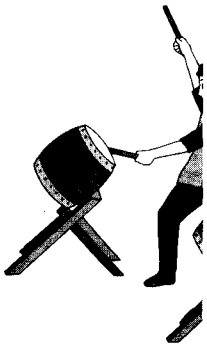
日時：平成19年5月12日（土）
AM12:00～PM16:00
会場：138タワーパーク
場所：野外ステージ
主催：愛知県太鼓連盟
後援：一宮市教育委員会

1. 三河神富太鼓（豊橋市）



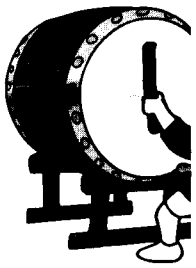
愛知県は豊橋市の西部に位置する神野新田町。
平成７年同町開拓 100 周年祭を迎え、郷土芸能として何か残せるものをと地元にある神富神明社（かんとみしんめいしゃ）の奉納太鼓として発足しました。会の名称もその神富神明社にちなんでつけたものです。
元々は、地元の自治会が主催する盆踊り大会の活動から始まった太鼓の会ですが、奉納太鼓を目的としてオリジナルな曲を創作し現在に至っています。
地元は、東三河を流れる豊川の恩恵を受け、農業・漁業の盛んな土地です。私共、三河神富太鼓の演目は、豊川の流れにちなんだ曲（五穀豊穣祈願、大漁祈願）を創作し、毎年 10 月半ばに催される神富神明社の祭礼で披露しております。
平成 13 年には(財)日本太鼓連盟、愛知県太鼓連盟に加盟し、活動の場を広げています。
現在会員大人10 名 / 小人10 名ほどで、各種団体行事、ボランティア活動、豊橋まつり市民総おどりに参加しています。

2. 海東流神楽太鼓保存会（海部郡飛島村）



愛知県海部郡の農村部では熱田大神楽の打法を受け継ぐ神楽太鼓が非常に発達しました。これには「神楽屋形太鼓」と「曲太鼓」の二つがあり、前者は歩行しながら打ち、後者は拝殿などで座って演奏します。これらの太鼓はほとんど同じ曲より奏打されるので『尾張の曲太鼓』と知られています。江戸の大神楽は尾張から出たといわれています。熱田神宮の神官たちが江戸に下って定住したときにできたものと思われ、その後形を変えて「江戸ばやし」となり、現在日本を代表する『無形文化財』となっています。
一方、尾張に残った神楽屋形は、屋形の中に獅子頭を飾り、太鼓を打ち鳴らしながら村中を巡回したところから『獅子屋形』とも呼ばれました。稲穂が垂れる秋の野面を渡って来る風に乗って聞こえる笛や太鼓の音は、今も昔も変わらぬ農村の風物詩です。星は移り、時は変われど、人の心に響く笛や太鼓の音はいつしか郷愁をさそわれる、それが尾張の太鼓『海東流神楽太鼓』です。

3. 一宮太鼓保存会（一宮市）

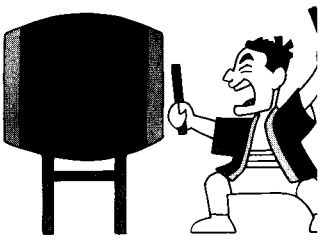


織物の都一宮市、世界のウール、ファッションの町一宮市。この一宮市には若者の心をとらえる郷土芸能がなく、何か若者にと昭和 49 年７月一宮市観光芸能開発研究会が発足し、地域住民に心のふるさとを取りもどす郷土芸能について協議され、その結果、日本太鼓を作ることになったのです。
今までの和太鼓は、ほとんどが雨乞い太鼓が多く、この一宮太鼓は織物の町らしく織物の音が基調になり、どこで聞いても尾張一宮市を浮き立たせる太鼓です。全国でも珍しいとテレビ・ラジオ等で紹介され注目を集めております。

4. 清須市清洲伝統芸能保存会（清須市）

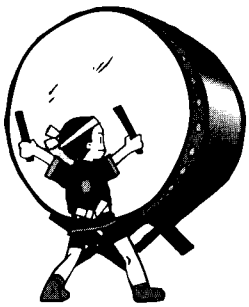
「清洲信長公出陣太鼓」
織田信長公没後、四百有余年。永禄三年五月十九日の朝、勝ち目のうすい今川義元との戦いを前に、敦盛を舞い熱田の森（熱田神宮）に必勝祈願し、法螺貝を合図に決意をかため「人間五十年下天の内をくらぶれば……」激しい戦場を太鼓曲で表現します。
「鯱太鼓」戦いのたびに盃を挙げ天下統一、英知決断し、三層の天主閣を守る、能舞を取り入れ、当時を表現した曲です。他演目は、城、戦太鼓、清洲城天主閣、お祝い太鼓、喜（鬼）面太鼓などがある。現在の清洲城天主閣には、勇壮な出陣の場面が往時そのままにご覧いただけます。保存会は昭和 56 年発足、63 年子供の部（継承太鼓連）を設け、青少年健全育成に、市の伝統芸能の保存及び活用を図ることを目的に積極的に活動しています。

5. 願成観音太鼓保存会（田原市）



“名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実一つ” 島崎藤村
“鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎” 松尾芭蕉
昔より歌人が好んで詠んだ風光明媚な温暖の地 渥美。すばらしき大自然のふる里 渥美。そんな大自然と観音様を信仰する心が解け合い、渥美の新しい芸能文化として、昭和 57 年に子どもたちを中心として発足したのが渥美太鼓「願成観音太鼓」です。太鼓は日本人の心の響きです。この太鼓を通し協調・調和・連帯・慈悲（やさしさ）・郷土愛の精神を学ぶことを目標としています。
活動は、ボランティアを中心として平成６年、神戸長田区への震災慰問遠征をはじめ、毎年夏の施設慰問遠征として東京・横浜・大阪・静岡の各老人ホームの慰問を続けながら、各種イベントにも多数出演し、特に平成元年、名古屋で行われた「世界デザイン博」愛知国体の採火式の開会演奏など、大きなイベントも数多く、平成 14 年には「正力松太郎賞」「愛知県ボランティア功労賞」を受賞することができ、さらに気を引き締め頑張っています。

6. 鯱龍太鼓（名古屋市南区）



名古屋には、昭和59年に完成した世界最大級の大太鼓“ん太鼓”があります。
この“ん太鼓”は、アフリカ・カメルーン国のブビンガーという樹齢1200余年の原木から作られ、胴の直径は240㎝、全長も240㎝、重量約3t（台車含む）というすざましい太鼓です。
また、胴の側面には、当時、119歳の世界最長寿　泉重千代翁揮毫の“ん”の金文字が、彫り込まれ、荘厳さと品格を兼ね備えた、まさに世界一の大太鼓であります。
この“ん太鼓”は、筑波科学博をはじめ大阪花博、名古屋城博など、大イベントに日本を代表するものとして、ひっぱりだことなり、その演奏者が昭和62年に設立したのが「鯱龍太鼓」です。
日本創作太鼓界の師、関刀鼓（かんとうこ）宗匠により、名古屋を代表する創作太鼓チームとして、金のシャチホコの鯱と、中日ドラゴンズの竜を龍として命名。
現在メンバーは約十数名。年間70回以上の出演をこなし、毎年、ん太鼓とともに名古屋まつりの宵まつり・パレードに参加しています。
そのほか、愛知県警刑事部の太鼓チーム「飛翔太鼓」創設の指導、各種学校での指導も行い、愛知県太鼓連盟の役員を務めています。

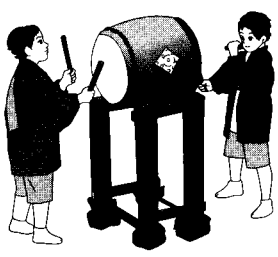
7. 尾張新次郎太鼓保存会（名古屋市港区）

尾張新次郎太鼓は、愛知県西部の農村地帯に伝わる神楽太鼓です。その太鼓名は祭り囃子の復活に生涯を捧げた、故西川新次郎氏の名前からきています。
西川氏は、かつて農村の祈願や御礼で叩かれてきた太鼓が、太平洋戦争、そして1959年の伊勢湾台風を経て消えかけていくのを悲しみ、1965年頃から、その復興を願いつつ神楽太鼓の技を精力的に若者へ伝えたのでした。その弟子たちが、1979年、尾張新次郎太鼓保存会を結成させました。
尾張新次郎太鼓保存会の神楽太鼓は大きく曲太鼓と神楽屋形（かぐらやかた）太鼓に大別できます。前者は、長胴太鼓と締太鼓を座して、檜製のバチを回転させたり、飛ばしたり曲芸をしながら通叩するもので、曲目には、神来舞、わたよせくずし、森津などがあります。後者は竹を細く割ったバチで、屋形の上に乗せられている長胴太鼓と締太鼓を立って叩くもので、長胴太鼓は、破れる寸前まで引っ張ってあり、非常に甲高い音がします。それぞれ神楽笛に合わせて奏叩するこれらの太鼓は、江戸時代に熱田神宮の神楽から発生したものです。

8. 東海太鼓センター（名古屋市瑞穂区）

東海太鼓センターは、1991年（平成3年）3月に創業。日本の和太鼓、民謡、民舞など民俗（民族）芸能の優れた伝統を継承し時代にふさわしい創作やアレンジ曲を創り人びとの生活と文化に役立て、根づかせることを目的に設立し事業をすすめてまいりました。
●毎年共同でおこなっている日本の響き大地の舞は、2007年には20回目を迎え、毎年50団体2000人が集うフェスティバルになっています。また、名古屋ドームに10万人が集まった私学フェスティバルでの千人太鼓の実施、ミレニアムでは、35,000人の市民の前で和太鼓演奏。愛・地球博事前のフェスティバルを愛知県下各地で10回の主催共催を240団体19,750人の参加でした。愛知県下400団体余りへと親交が広がっています。
第14回を迎える高校生和太鼓フェスティバルは、愛知県下の10校余り300人が出演するフェスティバルに成長しました。
●現在、二つの練習スタジオを持ち愛知、岐阜県下で約60ケ所（800人）で教室や指導活動を行っています。また、和太鼓と祭り用品の店、祭たいこやDONDONを営み、和太鼓、祭り用品などの販売も行っています。

9. 松平わ太鼓（豊田市）



松平地区の太鼓の歴史は、今からおおよそ600年前の「雲竜太鼓」にさかのぼります。
雲竜太鼓は、応永28年（1421年）徳川の始祖、松平親氏の3代信光の初陣に際して打ったのが始まりといわれています。この時、東の空に竜に似た雲がいまにも勇ましく駆けているかのように信光公ら松平家臣の目にうつったことから「三河雲竜太鼓」と名付けられました。
この後も何10回と合戦があり、戦勝祝いには、必ずこの雲竜太鼓が勇ましく打ち鳴らされたそうです。しかし、時代が変わるにつれ、この雲竜太鼓を継承する人が減り、今ではかすかに古文書にとどめるだけになってしまいました。そんな「三河雲竜太鼓」を打つことを目標に集まり、「太鼓クラブ」を結成しました。練習を重ねるうちチーム名をつけようと考え、和太鼓の「和」と仲間の「輪」が松平地区をはじめ、全国に広がればと夢は大きく『松平わ太鼓』と命名しました。
観れる太鼓、聞ける太鼓とするために毎週水曜日、土曜日の午後7時から地元のコミュニティセンターで練習を行っています。現在では、主婦、学生の会員も増えましたが、原点である雲竜太鼓の追求と仲間の輪を大切にこれからも大いに奮闘していきたいと思っています。

日本の伝統

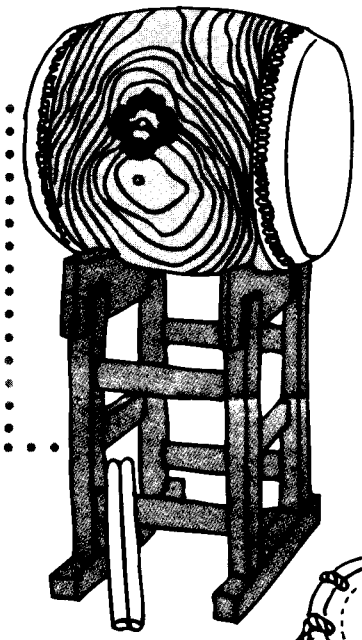
太鼓

雄壮に且つ繊細に心を打つ音色。

●太鼓、はるかな古代より

太鼓は世界の各地において、最も古くから使われていた楽器の一つです。音を遠くへ響かすことができるため、おそらくは仲間同士の連絡（伝達信号）などのために用いられていたと思われます。そして、人の心に響く神秘な音色を発する太鼓は、より多く祭や神事などの際に使われていたと考えられます。たとえば、日本神話の「天照皇大神岩戸隠れの伝説」の中にも太鼓が出てきます。また、太鼓は神仏・先祖の住まいとしても考えられ、高貴なものとされていました。それを精進潔斎し、全霊全魂をこめて打つことにより、中から神仏が現れて私たちの願い事を聞いてくれると信じられていました。すなわち神や先祖と唯一対話のできる貴重な呪具だったのです。

太鼓のいろいろ

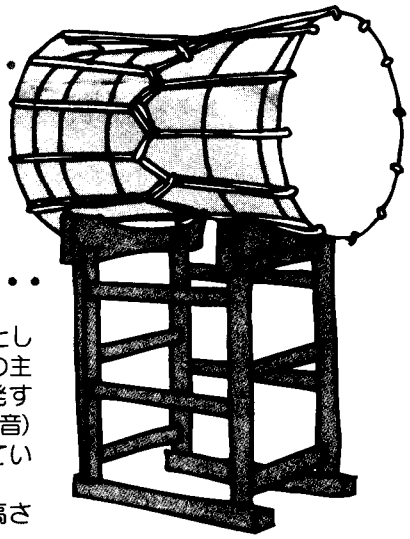


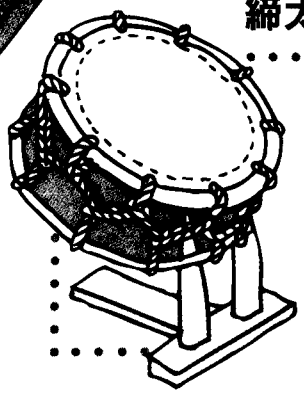
長胴太鼓（宮太鼓）

通称宮太鼓と呼ばれることからもわかるように、古くから神社などで使われてきました。祭りの時などにも多く使われるようになり、人々にもっとも親しまれる太鼓となりました。
大きさは1尺3寸（約40cm）から6尺（1m80cm）までです。

桶胴太鼓（大締太鼓）

大型のものと小型のものがありますが、組太鼓では、直径2.5尺（約75cm）以上のものが用いられています。これはこの太鼓が他の太鼓の音のギャップを低く深い音で包むという、たとえばベースギターのような役割をもっているためです。

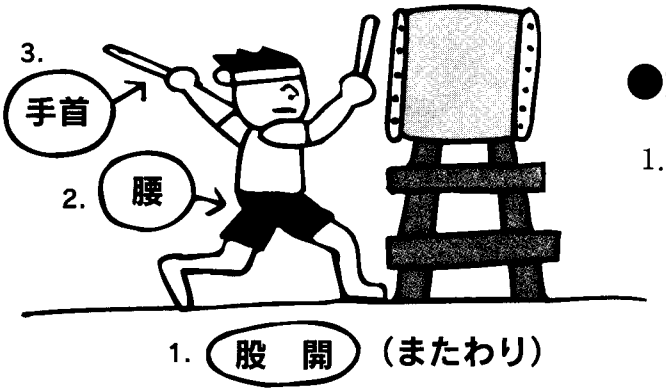




締太鼓（ひも締）

宮太鼓とともに綱締太鼓として一般的に知られた太鼓の主流であり、かん高い音を発するこの太鼓は、基本リズム（一音）を打つという役割を持っています。
直径が1尺（30cm）程度、高さは25cmほどです。

日本の太鼓（御諏訪太鼓楽園）より抜粋



●太鼓に向かう態＝姿勢

1. 股開（またわり）　2. 腰　3. 手首を基本にします。大地をふみしめ、そこからエネルギーを吸い上げ、腰でしっかりと態を決め、エネルギーを柔らかい上半身に伝えます。手首は柔軟に。